

# あいだ

# 182

発行＝『あいだ』の会

月刊 2011年4月20日発行 1部360円



栃木県大田原市 photo. Katsui Kinya

## あいだ182号 目次

断想2 藤枝 兎雄 ……2

《書評》「反芸術パフォーマンス史」から「限界史観」へ〔後〕——黒グライ兒『肉体のアナーキズム』 福住 廉 ……5  
ガラナ・パワー Guaraná Power ヴィル・ブラッドリー Will Bradley (訳＝高島平吾) ……14

《美術史散策》まあ、なによりも「労働の喜び」のためだったようですが……——「バラック装飾社」の初仕事 ……21

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第80回 相互浸透する北米アジア研究の現状と、閉塞する日本研究人文学の凋落と——第70回北米アジア研究学会ホノルル大会・傍聴記（その1） 稲賀 繁美 ……22

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第80回

## 相互浸透する北米アジア研究の現状と、閉塞する日本研究人文学の凋落と——第70回北米アジア研究学会ホノルル大会・傍聴記(その1)

稲賀 繁美

(いなが しげみ/国際日本文化研究センター, 総合研究大学院大学)

AAS (Association for Asian Studies) はアジアを対象とする世界最大の学会組織だが、今年には創立70周年を記念しICAS (International Convention of Asia Scholars) と共催により、ハワイのコンヴェンション・センターを主会場として、その年次会を開催した。会期は2011年3月30日より4月3日まで五日間に及び、登録されたセッションは760を越えた。各4名の登壇としても、延べの発表件数は優に3000人に達する計算となる。日本では毎年この時期、ちょうど学年や予算年度をまたぐという不都合があるため、AASへの参加にはもともと不如意がある。加えて、おりから3月11日午後が発生した東日本大震災という未曾有の災厄のため、関東以東の関係者を中心として、かなりの数の参加予定者が出席を中止せざるをえない状況となった。そうしたなか、筆者は討論者として参加を要請されていたため、2007年のボストン大会以来4年ぶりに参加した。もとよりこの巨大会の全容など捉みようもない。きわめて限定された見聞だが、以下出席できた限りのセッションを縫い、筆者によるコメントを軸に、提起された問題や議論を簡潔に報告したい。今回の記念大会にあっては、専門領域の壁が人的交流や学術情報の流通を妨げており、そこに風穴を穿つことで新風を吹き込み、アジア研究を再活性化したいとの意図が見えた。

【学術発表第1日：3月31日(木曜日)】  
Session 5: The Permeability of Borders  
Artistic and Cultural Realities in East and  
Southeast Asia (Room 321B:8:00AM-10:00AM)

Gerome A. Feldman司会のThe Permeability of Bordersは東南アジア各地を話題として「浸潤性ある境界」の諸相を探る発表が6本と盛り沢山。まず関西在住のScott Johnsonが神坂雪華と津田青楓とを比較。稀観本の凶案集などを駆使した、対比列伝。話を聞くうちに思いだした。発表者とは奈良から京都にむかう近鉄線で偶然隣に乗り合わせ、議論を交わした記憶がある。以下は質疑での稲賀の評釈だが、1900年のパリ万国博覧会を経験した後の京都では、アール・ヌヴォーを日本風に調理した新凶案を考案した外様の新婦朝者、浅井忠と、これをマカロニ式として軽蔑した地元出身の神坂雪華とのあいだに、対抗が生じていた。浅井が京都の職人は手先の技ばかりで頭を使った仕事がないと批判したのに対して、神坂は京都の作り手は日本で頭をつくってから外遊すれば、それで十分だと切り返していた。浅井の薫陶を受けた津田は、浅井没後、農商務省による海外研修を経て帰国すると東京に移動し、夏目漱石の著作の装幀などに手を染める。今日でも京都の伝統工芸志向の職人志望者は神坂雪華を好むが、東京の芸術志向の美大生では浅井や津田の

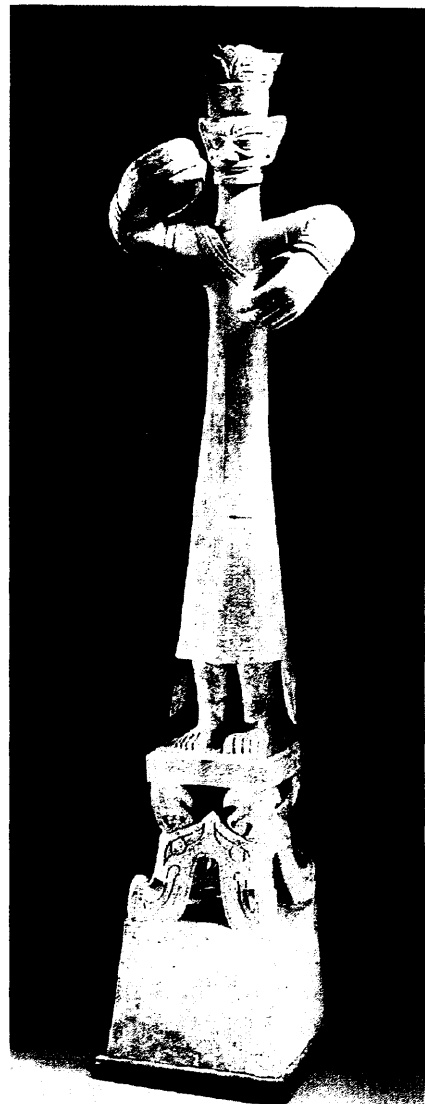
図案のほうが面白いとの意見が大勢を占める。Johnsonの発表は、舶来世紀末美術の受容と拒絶とを通じて、こうした日本国内の、東西の美的趣味の対立を裏書したものと評価できるだろう。

Feldmanは揚子江流域の三星堆遺蹟から出土された特異な青銅器とインドネシア島嶼部はニアス島、ゴーマー川流域の青銅器との意匠の類似から伝播経路を推定する大胆な仮説を展開した。60年代の伝播理論が信憑性を失うのと並行して、専門領域の垣根が高くなって、広域的な類似が見落とされるような傾向が行き過ぎた現状への反省に立つ問題意識だ。たしかに生命の樹木に鳥が留まる意匠が両者には共通しているが、これには、考古学的発見のうえに、共通の神話素の広がりという民俗学的見地から跡づけを得る可能性を残されているように思われた。また三星堆の出土品が意図的に破壊され焼却処分とうえ埋葬されている事実もよく知られる。支配者の交替にともない、先行する支配者の文化が破壊されたのではないか、といった推測もされている。だが、縄文の土偶が破壊された形状でしか発見されない、という事実もまた思い起こされる。破壊によって再生が約束される、といった呪術的な信仰が農耕儀礼と結びつき、祭具の破壊が為された可能性もあるだろうか。

Kazuko Kameda-Madar 亀田和子は狩野山雪の《蘭亭曲水屏風》に描きだされた多くの陶磁器の由来について、可能な限り同定を試み、その結果に立脚して山楽の折衷的で好事家的、あるいは学究的な陶磁知識を還元してみせた。専門的な陶磁史の知見を踏まえた斬新な解釈であり、従来の美術史学の主流をなす作品論を越え、作品制作当時の文化的な趣味を探る意欲を秘めた研究である。はたして山楽の歴史意識とは百科事典的なものか、編年には無頓着で雑纂的な蒐集家志向なのか、当時の権力者や後援者たちの趣味に迎合し、銘品所有者たちの自己顕示欲を満たすような総覧志向だったのか、さらなる踏み込みが期待される。

Mary Ann Rogersは中国陶磁の古染付な

どに歪な湾曲を施した特異な皿が見られることを出発点に、絵付けでもたらし込みの紋様など、左右対称を尊ぶ中国の審美観からは逸脱した作例が存在し、それらが日本向けの輸出製品だったことを縦横に論証した。以下、これも稲賀による敷衍だが、思えばこうした非対称図形の好みは伊賀焼などを始めとして、日本の茶陶の主流をなし、江戸に入れば乾山や織部の意匠へと受け継



三星堆出土の人物像

がれる。欧州でいえばバロック趣味に先鞭をつけるこうした逸脱振りは、19世紀後半の欧州では、日本趣味の代表的な美術評論家、エルネスト・シェノーによって非対照 *disymétrie* という用語に練り上げられた。その変奏は、論争へと発展した。輸出用伊万里磁器に日本陶磁の最高峰を見る、マンチェスターの蒐集家、ジェームズ・ロード・ボウズと、反対に不恰好な茶陶への珍重こそが日本美学の神髄であるとしてボウズを批判した、ボストン郊外はセーラムの、エドワード・シルヴェスター・モースとの衝突として顕在化した事件である。さらにこうした対立図式を念頭に日本の文化史を遡れば、弥生の整った形態に対する縄文の奔放自在の造形という対比に帰着するが、アポロン対ディオニソスという対比は、和辻哲郎のニーチェ咀嚼のみならず、敗戦後の岡本太郎による縄文評価に至る系譜を思い起こさせる。

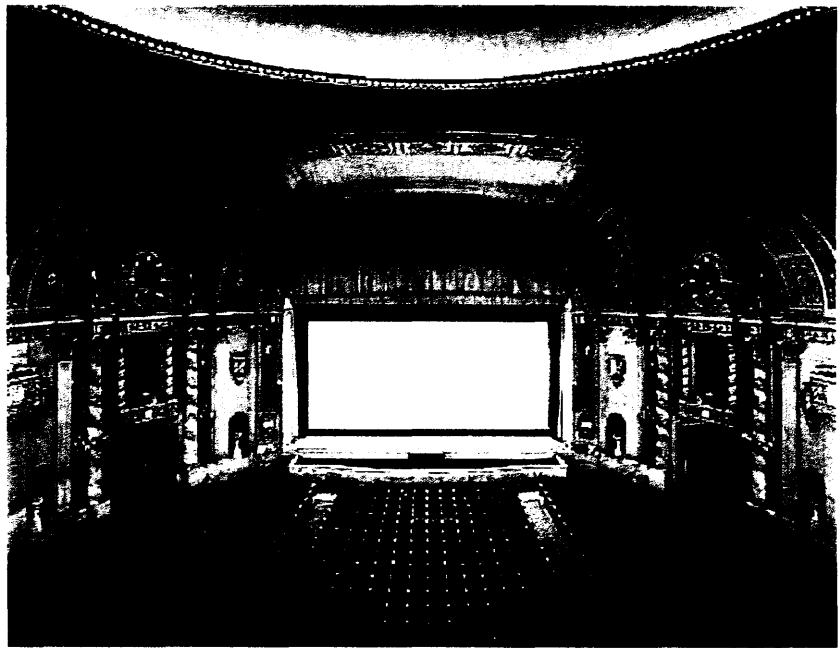
金沢21世紀美術館のDaisuke Murata 村田大輔は、自らも手がけた杉本博司の展覧会「歴史の歴史」History of History (2008) を話題に精緻な批判的議論を展開した。杉本の展覧会では自作を展示するというより太古の化石から古代の仏像彫刻などが披露される。スギモトの作品を見に来たつもりのお客様は、スギモトの所有物ばかりが展示されているのに面食らう。ここには作者の作品を展示する、という展覧会の大前提が疑問に付されている。だが同時に、杉本が展示したという事実が展示作品の格付けに貢献するとともに、展示者・杉本の目利きとしての正統性をも確保してゆく。

その杉本の展示をcurateとする美術館員は屋上屋を重ねる任務を強いられるが、はたしてそれは欲求不満の悪循環か、それとも自己購着によって利潤を得る特権なのか。ロサンゼルスからオタワ、大阪国立国際美術館から金沢の21世紀美術館へと会場を替えるたびに、スギモトは展示会場のpolicyと折り合いをつけつつ展示原則を縦横に変更したという。Curating the world curated by Sugimoto. それがcuraterに要求された

仕事だった。

狩野山楽とスギモトとを絡めると、藝術家にとっての歴史とは何かという問いがひらけてくる。自らの内に時間を封印した作品は、それ自体が時間のなかをたゆたうて現在に生き延び、現在の時間の推移とは異質な時間をそこに投げかけている。思えば30年以上前のスギモトは、映画上映中の劇場の舞台に向けてファインダーを開放したままで写真を撮影した。その段階では何を意図していたのかスギモト自身にも確信はなかっただろう。だがそこには2時間なら2時間の上映時間という経験が、一枚の感光紙のうえに圧縮還元される。時間を蒐集する定点観測が、やがてジオラマの複製撮影に展開し、展示というポリシーそのものの撮影へとスギモトを導いた。欧米近代の展示文化に対して、きわめて濃厚な違和感を抱いていた作家が、いまやそうした展示ディスプレイを異化することによって、そこから国際的にみても極めて例外的なまでに、大きな経済的利潤を引き出している。皮肉にもスギモトの古美術や古生物の蒐集品とは、その経済力の雄弁なる勲章でもある。

最後に、Wolfgang MarschallがFish and Chips ならぬFish and Shipsという駄洒落の題名を掲げて、ヴェトナムのドンソンの有名な青銅の鼓をはじめとする東南アジアの遺品を手掛かりに、主にインドネシアの遺蹟の岩の表面に描かれた船と魚の表象を検討した。先にFeldmanは鳥と樹木の意匠を検討したが、これが船に描かれれば、生命樹を運ぶ船となり、それらは葬送の柩と解釈されることが多かった。だが15年ほど前、松坂で出土した例を含めて、日本の埴輪の船を考えても、はたしてそこにいかなる象徴世界が投影されているのか、解釈に確証を与えるのは、時期尚早であろう。漁の様子を描いた光景でも、ただ一艘の船が、世界あるいは社会の隠喩としての機能を果たしている場合もあるのだから。



杉本博司 《劇場》シリーズより 1978年

**Session 52: Roundtable: Buddhism and the Medieval Religious Traditions of China/Tibet/Japan (Room 313A, 10:15AM-12:15PM)**

今回のAASでは、総じて宗教学・仏教学関係の発表が多い印象を抱いたが、まずは「仏教と中世の宗教伝統：中国、チベット、日本」という円卓討議に出てみた。ここでも、最初のセッションの用語を借りるなら、領域の境界を越えた浸透可能性permeabilityに注目が集まっており、グローバル化globalizationの次の鍵言葉はこのあたりか、との感触を逞しくした。基本的には外来の宗教である仏教が土着の信仰といかに混淆し、接ぎ木されたのかを地域の別を越えて比較するとともに、併せて専門家同士の国際交流を促進しようとの目論見である。参加者も北米や欧州あるいは日本に跨り、あるいはその間を往還する研究者たちが集っていた。冒頭にはJames Robsonが総論に替えた学説検討を行い、従来のsacred placeといった一義的な議論は時間、空間の両者にわたって再検討が必要であり、聖地が時代的に設

置され直す現象や元来の聖地が異教によって奪取され、宗旨変えが発生するといった現象への着目が必要であり、従来のポストコロニアルで流行を見た「流用」appropriation理論では把握が漠然としすぎており、宗教的実践の実態には迫り得ないことを批判した。

つづくChristine Mollierは仏教伝来後の中国の道教にみられる経典を取り上げ、道教の神格の呼称にサンスクリットを擬した名辞が取り込まれる反面、仏教側が道教の宇宙論を吸収するなどの剽窃が見られることを詳細に指摘しつつも、仏教と道教との相手方への謏告がともにパッチワークとなっており、あたかもクラブ・サンドウィッチでも食べているような感触だ、との比喻で聴衆の笑いを誘っていた。民衆教化のための説教では直接の語りかけゆえに繰り返しが多く、また呪文には精神的な治癒効果が期待され、救いを説くうえでも、意味の多義性こそが聖性を聞き手に印象づけるといった特質が観察された。ひところの文化的本質主義批判が、こうした相互依存の解

明へと発展したのであろうか。

つづくNobumi Iyanaga 弥永信美は古代以来の日本の仏教がいかに神道へと浸透したかを概説し、神道関係の文書には偽書が多いが、密教学の立場からみればその多くは修験道と混淆した密教の外典といった趣であり、抽象語は仏典から、宇宙論は易経から拝借して、そこに神道の神格の名辞が乗っかっているという図式を提示した。思うにこうした下地があればこそ、本地垂迹や逆本地垂迹の説も盛行を見たのであろう。

これを受けたFabio Rambelliは、札幌大学からサンタ・バーバラに移って、今では人気教授とのことだが、神道と仏教との関係を図示するにあたり、横軸に文化と自然、あるいは自文化と他文化の軸、縦軸に規範性と混沌性あるいはコスモス対カオスという軸をとり、自文化的規範性の高い神道と他者性に刻印された周縁的存在としての仏教とが日本宗教史で描いた相剋と位置転換のダイナミックを素描した。魅力ある図式だが、むしろ準拠軸そのものが時代とともに漂流するのであって、固定した座標軸のなかで神道と仏教との交渉を描くには、操作のうえでかえって無理があり、恣意的な単純化を冒す危険があるのではないか。佛教が生誕の地・インドでは衰退したのに代わって、日本の生得的なナショナリズムから発芽したトランス・ナショナルな仏教が、近代海外発展を遂げるに至ったという政治地理学的な主客転倒を「聖性の地理学」として描くのが、ランベッリの図式の意図だったことは、よく理解できるのだが。

欠席となったBryan J. Cuevasのチベットの土着宗教とインド仏教との関係に関する発表はMathew Kapsteinが代行して要約したが、これは割愛したい。

アメノミナカヌシノミコトが大日経の盧毘沙那佛に重ねて理解されるような神仏習合についても議論があったが、これはランベッリのような価値座標軸上の横滑り移動モデルよりも、重ね合わせの写し=移し、すなわち数学的な写像モデルで理解したほうが適切ではないか、との印象を得た。

#### Session 118: The Great Kanto Earthquake in History, and Commemoration (Room 319B 12:30PM-2:30PM)

日程からも分かるとおり、ひとつのセッションが終了して参加者と質疑応答を延長したり久闊を叙していたりすると、もう次のセッションには遅刻してしまう。おまけに通りすぎりにあちこちで旧知と出会ってしまうから埒があかない。昼食の暇もないまま遅刻して参入したのが「関東大震災、その記憶・図像・記念」。最初の発表は、Gennifer Weisenfeld。北澤楽天の『時事漫画』を縦横に駆使して震災復興事業への世相の揶揄を分析した。眼鏡に三つ揃えの後藤新平が、宴会の下足番に今夜は何番の番号札の靴を履いてゆけばよいのか、と尋ねている戯画がある。それぞれの靴には後藤の役職名を記した札が入っている。これは、復興事業であまりに多くの役職を兼任してしまったため、去就に混乱をきたした後藤への皮肉である。震災「焼け太り」や「泰山鳴動して鼠一匹」といった復興計画の羊頭狗肉を嗤う戯画も多いなかに、「官尊民卑」の風への批判も見られるが、論者によると、これはすでに徳川期には知られた表現であり、その裏で楽天の女性蔑視も顕著だという。

Janet Borlandは金華小学校の模範例を中心として、震災後の学校施設の復興事業に焦点をあてた。震災被害の集中した深川、浅草、本所、新橋などでは半数以上の小学校が倒壊あるいは焼亡した。耐火建築によるその復旧には1930年までかかり、当時の費用で5千万円がつぎ込まれた。

三人目のJohn Charles Schencking（登録締切りのため印刷物からは名前が脱落）は、安政の地震の際の鯨絵に始まり、「浅草十二階」の崩落、記念碑の計画が様式上の不適切ゆえ寺社の反対にあい撤回された経緯、つづく戦時下の疎開と空襲による再度の帝都破壊、いわゆる「不逞鮮人」デマによる虐殺にいたるメディア報道を分析した。

質疑では後藤新平と密接な関係にあった渋沢栄一の尽力により田園調布などの郊外

開発がなされた件に言及があった。以下は私見だが、戯画はあくまで現実の裏面であり、両者を比較考量することが不可欠だろう。英国のエベネザー・ハワードによる田園都市計画からチャールズ・ピアードの招聘、さらには関西モダニズムに連なる資本主義近代の進展とその関東洲への展開としての大連をはじめとする南満洲鉄道租借地の都市開発に至る経緯が、「帝国日本」の実相であり、そこにはソ連の五カ年計画構想の移植も加わる。さらに台湾経営に関与した後藤新平が医師としてとりわけ公衆衛生の改善に尽力したこと、そして後藤の出身地である陸奥が今回の東日本大震災の舞台となったことも想起される。

**Session 158: The Rhetoric of the Real:  
Representing Nature in Tokugawa-Meiji  
Writing and Visual Culture (Room 321A  
2:45PM-4:45PM)**

真実と流言飛語とは截然とは分別できない。真実もまたそれを語る形式を踏まえなければ流通しないからだ。情報 information とはその形式を整えること mise en forme を含意しているが、それでは真実あるいは本当らしさの基準とはいえば、これまた時代と文化によって異質である。「まことの修辞」Rhetoric of the Realと題して徳川期から明治期にかけての視覚文化と書き物と

に的を絞った本セッションが問題としたのも、真実の文化的負荷の測定である。その細部を不正確に復唱する代わりに、筆者のその場での即席のコメントを再録するにとどめたい。Princess Akiko 彬子女王はイギリスのお雇い外人として医学を教えたウィリアム・アンダーソンの日本絵画史研究を検討した。アンダーソンは日本の絵画伝統に写生の欠如していることを遺憾とし、円山応挙らの四条派は比較的高く評価しつつも、人体解剖学の不徹底を批判した。この価値判断からただちに思い起こされたのは、同時代にフランスのアカデミーで最高位にあった画家、ジャン＝レオン・ジェロームの言葉である。京都の画家、竹内栖鳳は1900年のパリ万国博覧会の折に訪れたフランスで、ジェロームのアトリエを訪問している。フランス官展派の巨匠は日本の花鳥画には理解を示しつつも、日本人の絵では動物の解剖はきわめて幼稚で未熟だと指摘し、自らのライオンの写生を得意げに栖鳳に示した、という。思えば栖鳳が帰国後ただちに着手したのは屏風の《金獅子》であり、動物園で熱心に写生を試みたという逸話からは、栖鳳のジェロームに対する敬佩心のほども直に伝わってくる。してみれば、アンダーソンはこうしたアカデミーの教則に近い価値観に基づいて日本絵画を鑑定していたことになるだろう。それは光琳の装飾性を高



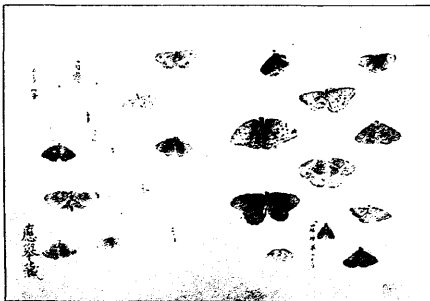
ジャン＝レオン・ジェローム 《ふたつの威厳》



竹内栖鳳 《金獅子》 1901年

く評価したルイ・ゴンスなどは大きく異なった狭い「写実」観、いかにも外科医といつかれの職業に相応しいアカデミックな美的価値観だったともいえよう。

Hiroko Kato 加藤弘子は丸山応挙の「写真」概念を検討し、応挙のいわゆる裸体人物の習作が直接の写生なのか、それとも粉本による再構成なのかを考察した。たしかに裸体習作とされる作品に描かれた顔面が、ほかの作品の歴史人物と酷似している場合も見受けられる。とすれば部分を組み合わせる技法に依存していたことは確かだが、そこから裸体部分の描写も写実ではない、と断じたのでは、短絡した議論となるだろう。さらにそもそも応挙の同時代に、こうした区別は意味をもっていたのだろうか。今橋理子も江戸中期の昆虫標本写生などを分析して明らかにしたとおり、実物の写生も、粉本の模写も、どちらも「写し」だったのであり、オリジナルかコピーかといっ



丸山応挙 《蝶》 写生帳より

た「近代的」な区分は無意味だったはずだ。指定討論者のMaki Fukuoka福岡真紀も指摘したように、「自然さ」とか「写実性」といった基準に関する享受者の歴史性、さらにはわれわれを含めた観察者が依って立つ、記述的でもあれば価値論的な美的判断の規範そのものの歴史性、時代拘束性に配慮することが不可欠だろう。

これはChelsea Foxwellが論じた狩野芳崖にも当てはまる。たしかに芳崖は細部における細密精巧の追求とともに西洋アカデミー一流の空気遠近法をも大胆に取り入れて「近代的」な龍を造形した。ここにはすでに「写実」をめぐる対立する価値観が競合している時代相が浮かび上がる。そもそも架空の動物を「写実的」に描くとは何を意味していたのか。とすればこうした作品の「写実性」の達成度を論じようとする姿勢そのものが、余りに修辭的に過ぎることになる。

さらに陶磁の世界では、古の名物の「写し」の技術こそが珍重されたのであり、オリジナルな創作が造形上の価値を発揮するようになるのは、大正末期、おおよそパリでアール・デコ展が開催された1925年以降のモダニズムの時代のこと、と言って語弊はないはずだ。とすればMaezaki Shinya前崎信也が論じた明治の陶工、宮川香山が1876年のフィラデルフィア万国博覧会で披露してみせた陶器の高浮彫り、小鳥や動物を造形してみせる超絶技巧は、いかなる「自



然主義」を目指していたのか。端的に  
 いて香山の造形は「野蛮人」たち——  
 と当の西洋人愛好者であるE.S.モースが  
 自己韜晦して自分たちをこう呼んだ——  
 が「これこそ東洋的」  
 と思って飛びつく奇抜な意匠を輸出振興  
 用に誇張してみせた、  
 展示用見本 specimen  
 for displayにはほかな  
 らない。塩田真がこ  
 んな浮彫りでは危な  
 くて触れない、実用  
 には無意味だと評し  
 たことなど、香山も  
 また先刻ご承知の事  
 態だったはず。

巨大な蟹を貼り付  
 けた有名な巨大な水  
 盤（2002年に重要文化財  
 に指定）を、香山は最  
 晩年の1916年に再制  
 作しているが、論者  
 指摘のとおり、ここ  
 には、「写実性の追  
 求」というよりも、  
 むしろ乾隆帝時代の  
 清の作例の「写し」  
 という意識があった

やも知れない。商人としての香山は、技巧  
 上の力業が過剰の余り「グロテスク」とな  
 り、審美性と背反することも十分意識して  
 いたのではなかったか。だからこそ香山は  
 時代や流行の推移に応じて、次々と技法や  
 様式を変貌させ、やがて中国磁器を模した  
 真葛焼へと脱皮してゆけどの才覚を備え  
 ていた。指定討論者も指摘したように、伝  
 統ある京都ではなく、歴史の浅い横浜に抛



狩野芳崖 《飛龍戯児図》 フィラデルフィア美術館 1885年



宮川香山 《渡蟹水盤》(部分) 1916年再制作

点を移せばこそ、香山にはこれといった対  
 抗馬が出現せず、横浜を代表して帝室技藝  
 員として遇せられる僥倖をも得たはずだ。

夕刻からは基調講演や観劇の予定が組ま  
 れ、午後7時からはさらに2時間の発表  
 セッションが続行された。知人の発表も複  
 数あったが、もう頭脳飽和でさすがに退却  
 させていただいた。

(以下次号)